

News Letter

No. 09

2024年3月発行

WEBサイトはこちら▼



お問い合わせ/広島大学大学院 人間社会科学研究所 教職開発専攻(教職大学院) 広報担当:寺内大輔
東広島市鏡山1-1-1 TEL:082-424-7146 e-mail:terauchi@hiroshima-u.ac.jp https://kyoshoku.hiroshima-u.ac.jp/

修了生 インタビュー

後藤 ● 大学院修了おめでとうございませう。大学院生活の中で最も印象に残っていることは何ですか。

小川 ● 全部ですかね。授業や院生同士の会話、個性豊かな先生方。そこで色々な考え方があってのだと思いい、それらすべてが面白かったです。

大久保 ● 障害について学んだ授業が印象的でした。それまでの私は障害について深く考えたことがありませんでしたが、新しい考えに触れたことは新鮮でした。

藤本 ● 入学時のオリエンテーションが最も印象に残っています。先輩がすごくキラキラしていて、ここで学びが始まることを実感したあの日はすごく印象的です。

後藤 ● 大学院で一番大変だったことはなんでしたか。

小川 ● 2年目の生活が大変ですね。働きながら研究の時間を生み出すのはなかなか大変でした。

大久保 ● やっぱ修論です。修論やそれに伴うあらゆる提出物がある2年生の1月末は大変でした。

藤本 ● 直近だとAR発表会の運営ですね。自分の発表準備をしながら、全体のことも考えるのは大変でした。

後藤 ● 修了後の抱負を教えてください。

小川 ● 大学院で出会った縁を大切にしていきたいです。大学と(学校)現場がつながっていかないと良いものは生まれにくい気がしており、つなぐ意識をもって生活したいです。

大久保 ● 私は頼まれたことを全部やっ



てしまいがちなので、セーブしながら仕事をすることも勉強していきたいです。
藤本 ● 私の所属ゼミには「学校を来たい場所にする。来ない理由を子どものせいにはしない。」というモットーがあります。その視点を持って子どもたちと関わってみたいです。

後藤 ● 最後に、未来の教職大学院生にメッセージをお願いします。

小川 ● 現職の立場で院生になられる方は、1年目に今までにないような時間が生み出されるので、やりたいことをとことん突き詰めたいのではないかと思います。

大久保 ● 実は入学時は教職以外の道も考えていましたが、現職院生として来られている先生方の姿に憧れて、教育の魅力を感じることができました。入学する皆さんには、自分の目標や軸を考える2年間にしてほしいです。

藤本 ● 他大学から来た私は入学時に不安もありましたが、同じ方向を向いた人たちと集まって話ができることは、教職大学院ならではの魅力で、非常に深い学びになったと思います。是非入学をご検討ください。

執筆 後藤 湊 (教育実践開発コース1年)

LEARN in 広島 見学レポート



▲現職院生も支援ツールに興味津々でした

電腦人間になって、いきなり大学の講義を受けてみよう!

2023年10月4日・5日の2日間、広島県教育委員会と東京大学先端科学技術研究センターが連携して実施している、学校での学習になじめない子ども達を対象としたプロジェクト「LEARN in 広島」を広島大学教職大学院の共催として実施しました!

LEARNは東大先端研の中邑賢龍先生(本学出身)が率いる、学びの多様性を実現するための社会課題解決型実践プロジェクトです。1日目、スマートフォンやタブレット、ノイズキャンセリングヘッドフォン、スマートグラス(サングラスをかけると目の前に字幕が表示される)といったツールを使いながら、「自分の苦手を克服できるツール」は何かを試して見た子ども達。2日目は、それらを実際に使いながら「大学の講義を受ける」ということを体験していました。中邑先生の講義内容は「障害を理解するとは?」。小中学生向けではなく、本当に大学で話されるような専門用語を使った内容です。その講義を、自分の苦手や得意に合わせて講義の受け方やメモの取り方、意見のまとめかたを「選び取って」受けていた子ども達。

現職院生の方々も初めて体験するツールや子ども達の多様な学びの姿に驚いたり感心されたり。こんな多様な学びかたがどんどん広がるために、私たちにもできることがたくさんありそうです。

執筆 山崎 茜 (教職開発専攻講師)



▲中邑先生の講義には専門用語もたくさん。ホンモノの講義内容です



▲子ども達は自分にあったツールを選び取って学んでいました

NEWS!! 令和5年度 文部科学大臣 優秀教職員表彰受賞!



本専攻教育実践開発コース修了生の神尾陽一先生(広島市立広島商業高等学校)、高下千晴先生(呉市立荘山田小学校)の二人が表彰されました。次号では受賞を記念したインタビューイベントの内容をお届けします! 神尾先生、高下先生、本当におめでとうございました!

令和5年度 広島県教育奨励賞受賞!

本専攻学校マネジメントコースP2生の橋本嘉文さん(現職教員院生:福山市立千田小学校)が優秀教職員として受賞されました。橋本さん、本当におめでとうございました!



『思い』のマネジメント (Management By Belief) を基盤としたカリキュラム・マネジメントに関する研究

長光 優樹 (学校マネジメントコース2年)

高等学校においては、キャリア教育の充実が求められています。しかし、依然として大学入試に対応できる学力保障の意識が強く、生徒の「知りたい」「やりたい」の前の段階にある、言葉にしにくい「思い」が十分に育まれていないのではないかと、という課題意識が本研究の出発点です。「思い」を耕し、育てていくために、所属校(県立高等学校普通科)におけるアクションリサーチでは、教育研究部副主任として、生徒とともに「ワクワク」を大切にしながら、主に1学年の「総合的な探究の時間」のカリキュラム開発を担いました。探究活動を通して「文化祭や体育祭に増して成長できたと思います」と、自ら学びをつなぎ、成長を実感している生徒が現れています。その生徒の姿は、教員だけでなく地域にも影響を与え、「学校づくり」と「まちづくり」が連動し始めるなど、予想以上の成果を生み出しています。1年間を振り返り、「学びのつながり」は「人のつながり」ということを強く実感しています。人とつながる直接経験が「学びを深掘りする起点」であることを大切に「学校づくり」を、スクールリーダーとして推進していきます。

私の研究



院生の研究内容をご紹介します!

中学校家庭科におけるピア・ラーニングを用いた授業開発 — 学習方略に焦点を当てて —

小佐古 澤 (教育実践開発コース2年)

現在、家庭科教育において、高齢化や共働き世帯の増加など家庭環境の変化により生活経験が薄れ、これまで日常生活の中で経験的に身に付けていた生活を営むための基本的な知識、技能や学習方略の習得が困難になっています。この状況に対し、学習者同士が対話・協力を通して互いの力を発揮することを目指すピア・ラーニングと呼ばれる学習方法が成果をあげています。とりわけ、実践的・体験的活動が重視されている家庭科教育においては、ピア・ラーニングが生徒相互の高め合いを促すとされています。そこで、中学校家庭科にピア・ラーニングを用いた授業を構想・実践し、学習方略の使用を促す学習過程から実証的に検討することを目的としました。

本研究の成果として、意図的にピア・ラーニングを仕組むことや教材を工夫し活用することで学習方略を高める可能性が示唆されました。しかし、単元によって効果のあった学習方略のみ見られたため、今後教員になった際には、家庭科のどの単元でどんな学習方略をどのように高めることができるのかという視点を持って、授業づくり等をしていきたいです。

ご指導いただいている先生方の教育・研究

学び続ける教員であり、 学び続ける自分でありたい

学校マネジメントコース

杉原 満治 先生

すぎはら みつはる

大学院人間社会科学部研究科 准教授
専門分野: 学校経営、スクールリーダー育成、地域学校経営



杉原先生は、中学校理科教諭、市教育委員会、主幹教諭、教頭、校長、県教育委員会という豊かな経験を活かし、現在は実務家教員として、専門性の高い教員養成や「ミドルリーダーの育成」の研究にご尽力されています。

杉原先生へのインタビューの中で印象的だったのは、杉原先生が常に学び続け、改革に挑んでいたことです。中学校の校長時代は「総合的な学習の時間」を見直し、生徒が模擬会社をつくり地域の企業と協力して商品開発をしたり、衰退しつつある地域の祭りに生徒が企画から参加して地域の方々と一緒に祭りをつくり出すような取組を進められたそうです。どの立場になっても学び続け、教育も自分自身もアップデートしようされていると感じました。杉原先生は企業や経営の本がお好きで、参考しているそうです。インタビューの中で、「アントレプレナーシップ(起業家精神)を大切にしたいと思っています。「起業家」というと社長を育成するのとか勘違いされがちですが、考え方としては、「新しい価値を生み出すとする人材」を育てていきたいということです。」とおっしゃっていました。その信念が学び続け、改革し続ける力の源だと感じると同時に、杉原先生のように学び続ける教員でありたいと強く思いました。



▲受講者のレポートの振り返りから、新たな問いや価値につなげる杉原先生

執筆

牟田 圭佑

(教育実践開発コース1年)

益田 天喜

(教育実践開発コース1年)

市民の自走を目指して

教育実践開発コース

永田 忠道 先生

ながた ただみち

大学院人間社会科学部研究科 准教授
専門分野: 教科教育学、社会科教育



永田先生は、社会科、生活科、総合的な学習の時間についての歴史的研究をご専門とされています。先生が研究の道に進んだ理由は、学校現場の立場での地理、歴史、公民などの学びの統合を考えていたが現実には難しく、まずは現場を離れて理論的な理想の追究を志してのことだったそうです。現在は、小・中・高校の授業やカリキュラムについての理想と現実を、学校現場の先生方と対話的に考え合ってもらえます。

教職大学院の院生に対して「(様々な大学・学部から集まった環境の)多様性を楽しみ、差異を大事にしながら」「自分がどんな先生(市民)になりたいかを第一に考えて研鑽してください」とのお言葉をいただきました。

インタビューを通して、地理・歴史・公民をバラバラではなく総合的にどう考えるか、児童・生徒が市民として自走できるにはどうすれば、との思いが研究の中心にあるのだと感じました。また、インタビューの中で、甲子園で優勝した高校が話題になりました。その高校では、生徒たちが監督に練習を課されるのではなく、自分たちで考え苦しみながらも楽しむ野球で結果をつかみました。そのような姿勢は、児童・生徒が自分の力で自走できる理想型の方であり、本来的に学校教育が目指すところであると考えました。



▲永田先生が執筆された書籍

執筆

高智 信行

(教育実践開発コース1年)

大木 康平

(教育実践開発コース2年)

様々な経験を通して学び続けること

教育実践開発コース

中島 敦夫 先生

なかしま あつお

大学院人間社会科学部研究科 准教授
専門分野: 生徒指導・学級経営方法論、教育実践学



中島先生は、本年度より本教職大学院へ赴任されました。教職大学院の卒業生でもあるため、広島大学の院生や学生には大きな期待をもっておられます。実務家教員として現場での経験を伝え、学生に希望をもって現場に出てもらえるように、という強い思いをもって日々ご指導くださっています。

大学院では、異文化との共生を目指した、道徳と図工の教科横断的なカリキュラム開発に向けて、研究をされていました。折に触れて指導に関わっていただいた教員方の助言や提案を「自分のためになる経験は受け方が良い!」と率先して取り入れ努力をされた結果、研究を大成されたのはもちろんのこと、その後の教育センターでのご勤務のお仕事にも繋がったそうです。

インタビューの中で、本田宗一郎の「失敗することを恐れるより、失敗しないことを恐れよ」という言葉を紹介してくださいました。教員生活で巡り合う様々なチャンスを逃さず、前向きな気持ちで経験をすると良いと教えてくださいました。また、教師となって現場に出た際に、先生のような誠実さと謙虚さで目の前の生徒に向き合い、学び続ける人であるために、教職大学院で出会えた方々と積極的に交流をはかり、力をつけていければと思います。



▲授業「海外教育実地研究」にも参加されていました

執筆

澤田 侑奈

(教育実践開発コース1年)

田中 佑明

(教育実践開発コース2年)

編集後記 / 第9号

広島大学教職大学院ニューズレター第9号をご覧いただき、ありがとうございます。今回の号では、修了生インタビューを掲載しました。お世話になった先輩方が教職大学院を離れてしまうことは大変寂しく思いますが、先輩方のご活躍をお祈りいたします。最後に、研究発表会などでお忙しい中、インタビューにご協力いただいた先生方、院生の皆さまに感謝申し上げます。ありがとうございました。

担当 / 沖坂 柚香
(教育実践開発コース2年)